

第 64 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

創価中学校 2年

辻 創介

課題①

よりよい未来に向けてあなただったら国連の場で何を訴えたいか。

副題

「日本の療育のすゝめ」

僕は三歳の頃、言語発達に障害があると診断されました。幼児は大人のしゃべる言葉を生活の中で何度も聞いて自然に覚えるそうですが、僕の脳のつくりは少し違ったようで、言葉を音として聞いている部分があり、意味がわからず何度も聞き返して説明してもらわないと理解できなかったり、自分の思っていることや考えていることを言葉にするとおかしい文章になってしまったり、文章を組み立てて声に出すまでに時間がかかったりします。小学一年のときは、学習室で少人数のクラスで先生にじっくり関わってもらいました。小学二年からは普通級で過ごしましたが、教室がざわついていると先生の声がどれなのか聞き取れず、大事な連絡を伝えられないこともありました。でも週に一回、隣の学校へ通級という形で療育を受けることができました。そのおかげで、今は障がいに関することなく生活しています。僕のような障がいのある子は、療育を受けることで不自由さを克服する人も多いと思います。今は、障がいのある子たちの未来のために療育があると言っても過言ではありません。

しかし、本当に療育を受けるべき子は障がいのある子たちだけなのでしょうか？母はよく言っています。「療育は全ての子が受ける権利があってもいいと思う」と。確かに僕には障がいがあったから療育を受けられたのであって、健常者にくくられていたら受けられなかったと思います。僕が受けた療育は、幼児期には言語療法、作業療法、音楽療法、プールや運動を通しての活動。小学生になってからは、言語療法に加え、遊具やスポーツを通してのコミュニケーション能力やゲームを使ってソーシャルスキルを学んだり、とても興味を惹かれる楽しくて内容の濃いものでした。学校の授業では教えてくれないこともたくさん吸収させてもらいました。健常者と言われる子ども達の中にも日常的に不自由に感じていたり、助けが必要な子もいます。僕の経験を聞いたら、受けてみたいと思う子は少なくはないはずです。母がすべての子に受けてもらうべきだと言ったのも納得できます。

現在、「インクルーシブ教育」というものが世界で取り入れられています。インクルーシブとは、日本語で包摂的といい、すべての人を「ある範囲内に包み込む」という意味があります。つまり「すべての人が同じ環境で勉強ができる教育法」ということです。障がいがあってもなくても同じ土俵で勉強できるということは、本当に素晴らしいことです。さらに僕が受けてきたような療育を小学生までの義務教育の早い段階で希望者全員が受けることができれば、いまよりもっとみんなの能力を引き出せるのではないかと考えました。

エス・ディー・ジーズの目標4には、「すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提案し、生涯学習の機会を促進する」というものがあります。これは、皆が同じ環境で等しく教育を受けられるということにとどまらず、「自由に教育環境を選んでいける」という新しいメッセージを含んでいるのではないのでしょうか。

僕が受けてきた日本の教育(療育)環境の良い部分が、世界のすべての国に良くあてはまるかは未知ですが、エス・ディー・ジーズの「包摂的かつ公正な質の高い教育を提案」という目標達成に、僕の経験が少しでも役に立てれば嬉しいです。